

「東日本大震災の証言」から何を学べるか —東松島市の証言集をもとに—

佐藤 翔輔*

1. はじめに

改めて言うまでもなく、災害の経験を記録に残すことは重要である。大半の人は、一生のうちで 2 回以上災害を経験することは稀である。いざ災害を経験するときに、「ぶっつけ本番」からスタートする状況の中では、「先人に学ぶ」ことが最も効果的な学びになる。災害の経験は、「証言」「体験談」のように言語化され、「記録」として残されることはしばしばある¹⁾。この体験の記録は、「先人に学ぶ」上では、まだ災害を経験していない人にとって重大な役割がある。

それでは、災害に関する個人の「証言」「体験談」からは、どのようなことを学ぶことができるのだろうか。「証言」とは、災害の「事例」(災害事例)であり、個別的・具体的な生の体験である。本稿では、東松島市が発刊した「東日本大震災の証言」²⁾に掲載されている証言を分析することで、同誌から「学べる内容」としてのその全体像を捉えていく。

2. 分析対象

「東日本大震災の証言」は、幅広い世代と広範囲な地域での証言が集まったものになります。図 1 に、語り手の年齢・性別を示します。全部で 138 名の方から体験を記録することができている。下は 10 代、上は 80 代と、幅広い世代から構成される。男性は 40 代が、女性は 50 代の語り手が多い。図 2 に、震災発生前のもともとの語り手の住まいの地域を示した。東松島市全域からの体験を集めることができおり、大曲地区や野蒜地区での証言が特に多い傾向にある。

3. 分析結果

ここでは、証言の内容の分析を試みる。語り手一人から、うかがえた話の内容は決して「一つ」ではなく、複数の内容が含まれている。そこで、次のような手続きを行った。1) 138 名の語り手を読み込み、複数の内容(トピック)が記述されているものと判断される場合には、その証言を分割する(単位テキスト化)、

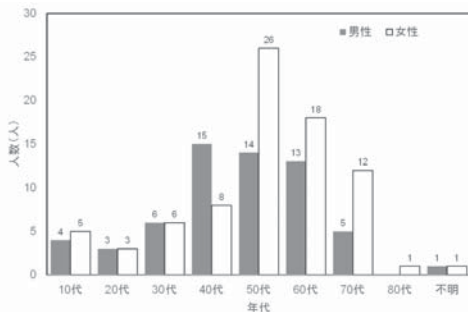


図 1 語り手の年齢・性別の分布

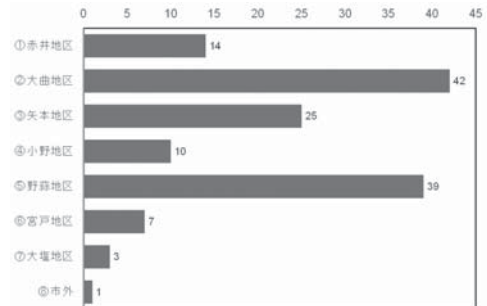


図 2 語り手の住まいの地域 (震災発生前)

*東北大学災害科学国際研究所

2) 著者らが内容分析³⁾によって、各単位テキストに対してアフターコーディングを行い、ラベルを付す。3) その結果を集計する。

この結果、138名の語り手から全部で469のトピックが得られた。これらを内容分析によって22種類の内容に分類した(図3)。また、その内容は、被災体験談と、未来に向けてメッセージ等に大きく大別された。このうち、20件以上あった内容について、一部、具体的な中身を下記に述べる。斜体文字は、実際の証言テキストのうち、ラベル名と関連性の高い箇所である。

- ・震災発生時の津波からの避難：◆地震の時は自宅にいました。家族は主人と息子の3人ですが、息子は仙台にいました。自宅にいた主人と車を捨てて、最初から歩いて逃げたんです。歩いて逃げる途中で大曲市民センターがあって、避難所と書いてあるので、主人がここでいいだろうって。3階建ての大曲小学校まで行こうと私が言っても頑として動かないから、仕方がないので、大曲市民センターに避難しました。避難して12分ぐらいして、窓から外を見たら、向こうから水の壁、真っ黒いのが来たんです。(大曲地区、60代、女性) ◆私は1～

2才児と、ホールとは別の場所で、玄関の近くの部屋にいました。揺れた時、立てないくらいで、電気の蛍光灯が落ちてきそうで、布団をかけたいけど、立ってかけることができない感じでした。とにかく自分が冷静にならなくちゃと思いました。その時に役所の人が「津波だからすぐ逃げて」と。その顔が尋常じゃなかったんです。なんかこれはすごいことだなと思いました。この辺のちょっとした津波じゃないと瞬時に思いました。車はやっぱり(渋滞のため)動かなかったんです。私も浜なので自宅を目の前にしていました。通りの右側の家だったんですけど、そこに高校を卒業した息子がいるかもしれないと思いつつ通り過ぎました。車が動かないままずっと来て、途中でもしここに津波がきたらどうしよう、ってずっと思っていました。もしそうなったら、自分は死んでも子どもは助けなきゃという気持ちでいました。学校の校庭には着いたんですけど、「どこに逃げる？」って言った後、「津波きたー」という声で走って、とりあえず濡れないで避難できたんです。子どもたちは泣かなかったですね。本当は「お母さん」って大きな声で泣きたかったはず。やっぱり子どももわかっていた

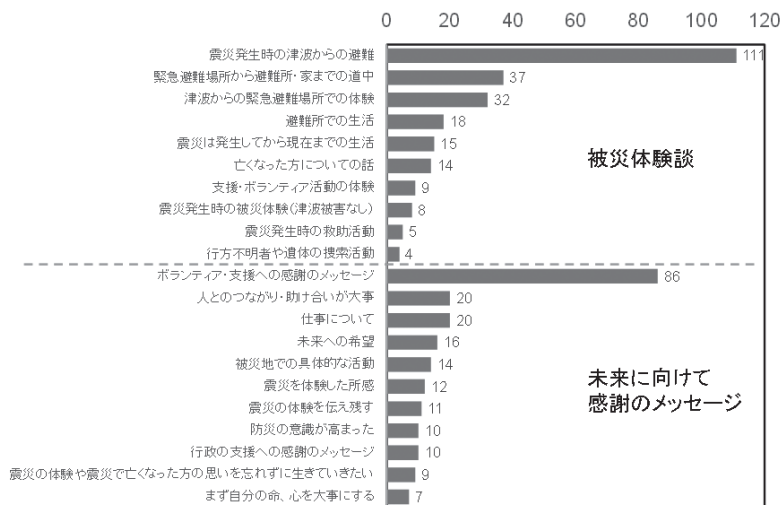


図3 証言の「内容」の分類

んでしょうね。こういう時にそんな態度は取れないって。(大曲地区, 30代, 女性)

・緊急避難場所から避難所・家までの道中:

◆一晩明けて、ちょっと様子を見に行こうと思って自宅へ帰ったら、もうこりゃなんじゃこりゃの世界で。あっちに丸太が転がっているし、こっちに何だかわからない物も転がってるしで、泥だらけの中を帰りました。自宅に戻った後、何かできないかなと思って(ラジオ局に)行ったんです。その時は、ラジオ石巻と日和山に受付が作られていて、無事な方は誰かに向かって「どこにいますよ」みたいなメッセージを読んでました。(矢本地区, 女性, 40代)

◆次の日水が少し引いて、主人も水の中を漕いで実家に辿り着いたので、母と主人が1人ずつ子どもをおぶって、長男は自分で水に浸かりながら南小まで歩いて避難して来ました。南小まで来る間に、亡くなっている方もいたり車もすごい状態だったりで、子どもたちに見せないように気をつけながら来たそうです。(赤井地区, 女性, 50代)

・津波からの緊急避難場所での体験: ◆そこに次の日の朝までずっといました。靴下も脱いでいて、ジャンパーも着てなかったのですが、すごく寒かったのですが、非常用持ち出し袋のアルミ箔を着ていました。近所の人10数名で焚き火しながら過ごしました。夜は流された車のクラクションが鳴りっぱなしで、周りから「助けてー。助けてー。」という声が一晩中聞こえていましたが、どうすることもできず、今でも(思い出すから)夜がいやです。(野蒜地区, 女性, 10代) ◆山の方に人がいて「上がって来い」って言われたので、そこで一晩野宿しました。野宿でも、30人近く避難している方がいたので。子どもたちとお年寄と怪我をした方は、掘っ立て小屋みたいな中で。動ける私たちみたいな人は「とりあえず、外にいろ」って。そこで火を焚いてもらって。飲み食いはできなかったけれど、鍋があったので火を沸かして、雪を溶かしてお湯にし

て、湯呑茶碗1個でみんなで1口だけね、と。それで一晩明かしました。(野蒜地区, 女性, 40代)

・ボランティア・支援への感謝のメッセージ:

◆一番印象に残っているのは、保育所で泥かきをしている時に、突然トラックが止まり、トイレトーパーやティッシュとかオシメとか手作りのパンを持ってきてくれたんです。何の団体とかじゃなく、東京から近所の子どもの物を集めて持ってきてくれました。有明の集会所に避難している方々にも分けたりしました。東京でもあの時は物が無いのに、スーパーに並んでいたら、被災地に行くという話を聞いていた方々が、買った物を持って行って下さいとよこしてくれたそうです。その方が1年の間に何回も来てくれたんです。届けてくれたものを、保護者の方に分けたり、私たちも何もなかったので使わせていただきました。見ず知らずの方ですが、そういう支援が本当にありがたかったです。(赤井地区, 女性, 50代) ◆震災後は、欲が若干無くなったかな。生かされたことのありがたさが大きいですね。精一杯、亡くなった方の分まで頑張って生きていこうかなと思います。本当に大勢の方々に助けられたので、ありがたかったですね。同じボランティアでも、市を通して来る方だけでなく、個人で来る方もたくさんいらして、避難所でも食事をごちそうになったりとかね。お世話になったことへの感謝の気持ちを忘れないようにしたいですね。(大曲地区, 女性, 70代)

・人とのつながり・助け合いが大事:

◆地域性っていうか、例えばストーブつけるにも油ないとね、近所の方が家から少しずつ持ってきてくれたんです。あと、家にあるとりあえずの食べ物を持ってきてくれて。何となくそういう雰囲気なのね、この辺の地区は。知らない人にいろんな物いただきました。次の日(3月12日)の朝、軽四輪で山盛いろんな食料を積んで山形から来てくれた人がいるんです。その人名前も聞かないでしまったんだけど、すごくうれし

かったですね。みんなで何とかしようと、そういう気持ちで来てくれたと思うんです。やっぱり、常日頃いろいろと人の付き合いとか、人の関わりとかを大切にすれば、こういうふうになると思いますよ。急にはできないのね、こういうのは。(大塩地区、男性、年齢不明) ◆自助共助ということをいつも言うんだけど、自分のことはともかく、共助は難しいんだよね。特に近所づきあいのない人は難しい。ひとり住まいのお年寄りがいて、息子もいるんだが、その息子もまた近所づきあいが無い。だから、何かあっても声をかける人がない。その息子が「うちのおばあさん、1人だから何かあったらお願いします」とかあればいいのに。今からは、その近所づきあいから教えていかなければならないです。なんといっでもうれしかったのは、自衛隊員さんと一緒に活動したことでした。不明者を捜索する自衛隊さんと共に、マンホールの点検などを兼ねて地区の巡回をしました。10日目にわたしはゴムの胴長を手に入れました。足もとがずっと水につかりっぱなしの自衛隊さんが気の毒になり、水の多いところは自分から入るようにしました。ボートで人を運ぶとき、さすがに足がはれて歩けなくなってしまう、校舎から子どもを背負ってくるのを若い人にお願ひしました。ボートで運搬していると孤立した住人から避難所に連れて行ってくれるようお願いされました。生きているうちにもうこんな経験はないと思うけれど、自分の息子や孫には「人助け」ということを忘れてはならないと教えたい。自分を守ることと人を助けること。水に流れてきたパンの袋をあけて食べたこと、二中の避難所でバナナ半分で1日過ごしたこと、それを忘れるなど言いたい。(赤井地区、男性、60代)

- ・ **仕事について**：◆○○さんが一生懸命やっているのが見えるので、私たちが微力ながら頑張っただけで応援しなくちゃいけないかなと思っっています。私は誘われて、ここにいるうちは仕事をするので、いろんなことを忘

れることができ、よかったなって思うんです。ここに入れてもらったんで、何とか頑張っただけで盛り上げていければと。働くには笑ってやらないと。黙ってやるのも仕事でしょうが、笑ってやれば仕事も進むから、バカ言っただけで笑わせています。(大曲地区、女性、50代) ◆のりが手に入るんだしたらこの機械がほしいと思ひ、九州のメーカーに作ってもらおうよう、お願いに行きました。そうすると、次はその機械を入れる場所がほしいなあと思ひ。世の中も落ち着いてきたし。でも、まだ店舗として復活してないところもいっぱいあったから、もしかして、もう店をやらないというところもあるかもしれないし、まちなどの店長さんに、商店街にあき店舗があったら教えてくださいなってお願いしてました。そういうことなら、市に掛け合っただけであげるからという人がいて、ここを借りることができたんです。妹が言うように、何もなかったらそういう人の好意とか受けることがなかったけど、震災をきっかけに、いろいろな人にお世話になって、自分たちがこういうふうになればいいなと相談すると、「だったら手伝うよ」とか「私がやってあげるよ」という人が出てきてくれて。こんなふうにやってるけど、「みんなに払える給料を出せるかどうかわかんないよ」「いつ休業になるかわかんないよ」なんて言いながら、みんなの笑顔に支えられながら、頑張っただけでやっています。このみなさんが、のり工房のメインキャラクターですから。ここに来て集まっていると、みんな笑っただけで仕事ができるので。早く地元で仕事ができるようになりたいです。(大曲地区、女性、50代)

4. おわりに

本稿では、生の体験としての「証言」から学べることを何かを明らかにすすために、東松島市が発刊した「東日本大震災の証言」に掲載されている証言を分析した。同誌では、津波からの避難や、避難所での生活に至る過

程の内容の証言が多かった。このほか、ボランティアや支援への感謝、人とのつながりや助け合いの重要性について、仕事の再開に関する趣旨の証言が多かった

これら証言は、災害の「事例」（災害事例）である。これと対をなすものとして、事例調査や研究が積み重なってできた災害の「科学」（災害科学）を位置づけたい。後者の災害科学の特徴は「普遍的である」ことである。災害科学として記述されているものは、普遍的なものであるので、再現性が高く、他の災害対応や事前の備えで活用できる可能性は高い。その一方で、一定の抽象性を有しており、一般にはやや理解が難しいものもある。前者の災害事例、言い換えれば「生の体験」は、その逆で「個別的である」ことから、必ずしも再現性が高い（どの災害でもこうなる）とは言えないかもしれない。しかし、内容に高い具体性があるので、頭に入りやすい、状況を理解しやすいという特徴がある。災害を学ぶ上では、災害事例と災害科学のいずれかでは不十分であり、両者をバランスよく学ぶことで、両者の得意な部分と不得意な部分を相互に補うことができる。

なお、本稿は東松島市発行の「東日本大震災の証言」の巻頭言に寄せた原稿を一部修正したものである。

謝辞

本稿での分析は、東松島市図書館のご提案で機会を得たものである。本研究は、課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業・実社会対応プログラム「効果的・持続的な災害伝承を目的にした拠点構築手法のモデル化と実践的研究」（研究代表者：佐藤翔輔）より一部助成を頂いた。データベース化ならびに分析においては、東北大学災害科学国際研究所・早坂真紀技術補佐員のサポートを得た。

参考文献

- 1) 永村美奈, 佐藤翔輔, 柴山明寛, 今村文彦, 岩崎雅宏: 東日本大震災に関する記録・証言などの収集活動の現状と課題, レコード・マネジメント, 記録管理学会, No. 64, pp. 49-66, 2013.
- 2) 東松島市教育委員会 生涯学習課 東松島市図書館: 東日本大震災の証言, 2016.3.
- 3) Klaus Krippendorff: Content Analysis - An Introduction to Its Methodology, Sage Publications, 1980. (クリッペンドルフ: メッセージ分析の技法, 三上俊治, 椎野信雄, 橋元良明 (編), 勁草書房, 1989.)